中学校における「書くこと」の言語活動の指導はどうあったらよいか

長江　宏

はじめに

「書くこと」の指導に当たっては、外国語科の目標を分析して、具体的な内容を設定することが必要である。すなわち、

（1）外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養うこと。

（2）外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。

（3）言語や、文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培うこと。

これらの要素を「書くこと」の領域において具体化することである。

「書くこと」の各学年の目標は、いわば、発達段階に応じた達成目標ということができる。これらを旧学習指導要領では、「言語活動」、「言語材料」及び「題材」の三つの内容で達成しようというものであった。

新学習指導要領では、内容を（1）言語活動と（2）言語材料で構成している。このことは、英語を理解させ英語で表現する能力や態度を養うためである。つまりは、これが学年目標を達成するものになるからである。

新学習指導要領では、特に言語材料を弾力的に扱えるようにしている。このことは、言語活動の質を高めるために、文・文型・文法事項などを柔軟に運用できるようにしたものである。そこでここでは「書くこと」の言語活動のあり方について探ってみたい。

1　「書くこと」の言語活動のとらえ方

コミュニケーション能力を高めるためには、実際に、耳や口、目、手などを用いて聞いたり、話したり、読んだり、書いたりする言語活動が必要である。

さしあたって、「書くこと」の言語活動を行わせるのに当たって、具体的に指導すべき事項は、さまざま考えられるわけである。その一つ一つについて、どのようなねらいのもとに、どのように指導したらよいかということがポイントになる。

例えば、第1学年では、初めて英語を教科として学習させることから、言語活動において指導する事項は、基本的なものを精選して与える必要がある。もちろん、アルファベットを正しく書くことから始まって、dictationなど文を聞いて書き取ることへと移行していく。

第2学年では、第1学年の基礎の上に立って、やや進んだ程度の英語を用いて、あるまとまりのある数個の文や文章を書かせることになる。この場合、主題や話題の設定が大きな課題になってくる。

第3学年では、第1学年、第2学年の学習の上に、更に、文章を読んで要約したり、ある主題や話題を基礎として、まとまった文章を書くなど、幅広い言語活動が行われなけれ

ばならない。

それでは、「書くこと」の言語活動は具体的にはどのようなことなのであろうか。作業としては、まず、「語」、「句」から始まって、やがて文まで進め、それが次に、数個の文となり、あるまとまった内容を表す文章が書けるようにすることである。

しかし、この「書くこと」の言語活動が、円滑に行われるためには、語、句、文、文章を、十分聞いたり、話したり、読んだりする言語活動が大切で、単に「書くこと」の言語活動だけではなくて、総合的な言語活動を通して達成させることが必要であろう。

2　言語材料の扱い方

言語活動を行うにあたっては、言語材料を有効に活用することが大切である。新学習指導要領では、言語材料の扱いはどのようになっているのであろうか。指導計画の作成と内容の取り扱いのところで、次のように述べている。

「言語材料については、学習段階に応じて平易なものから難しいものへと段階的に指導するとともに、理解の段階にとどめたり表現の段階まで高めたりするなどして効果的に指導すること。その際、学習の基礎の段階では、簡単な構造の文、たとえば別表１、別表３及び別表４の文や文型のａに示す事項を主として取り上げ、発展の段階では複雑な構造の文、たとえば、文型に示すｂやｃの事項を主として取り上げるようにすること」これは、言語材料の弾力的な運用について、指導計画作成の上から、配慮する事項についてふれたものである。

「学習段階に応じて平易なものから難しいものへ」は、言語材料の学年枠がはずれて、弾力的な運用とすることができるので、扱いについては、考え方を示したものである。たとえば、第１学年であれば、アルファベットから始まって、語、語句、文となっていく。この場合、平易なものから、難度の高いものへとなっていくわけである。

「段階的指導」は、学年による発達段階もあるが、習熟度別の指導を検討することが大切である。

「理解の段階にとどめたり、表現の段階まで高めたりするなどして効果的に指導すること」は、生徒の発達段階や習熟度によって、理解にとどめるもの、表現までさせるものと多様な指導のあり方を示している。

「その際……」の部分は、具体的な別表の文・文型などについて、扱い方を示したものである。つまりａに示す事項を主として取り上げ、ｂ、ｃは発達の段階で取り扱うとしている。

3　第１学年の「書くこと」の言語活動

新学習指導要領では、第１学年の「書くこと」の言語活動において次の事項について指導することになっている。

エ　書くこと

主として次の事項について指導すること。

（ア）語句や文を正しく書き写すこと。

（イ）語句や文を聞いて正しく書き取ること。

（ウ）伝えようとすることを簡単な文で書くこと。

第１学年の「書くこと」の目標は、「初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて書くことができるようにするとともに、英語で書くことに親しみ、英語で書くことに対する興味を育てる」とある。

この言語活動を具体化するのが、言語活動の(ア)～(ウ)の３つの指導事項である。

それでは、具体的に指導事項について考えてみよう。

（ア）語句や文を正しく書き写すこと。

「語句や文を正しく書き写すこと」の指導には、その前段階として語句及び文を書き写すことができるようになっていなくてはならない。つまり、書写の指導が基本的な事項となる。

外国語を初めて学習する入門期においては、音声指導を重視する観点から「聞くこと」「話すこと」の言語活動を重点的に行うはずであるが、やがて文字指導を始めることになる。

同時に、教科書を用いて、文字を読むことの指導から、文字を書く指導に入ることになる。書くことが始まると、個人差に対応した指導が必要になってくる。したがって、書くことの指導には、周到な指導計画を立てて当たることが大切である。

そこで、つぎのような観点から指導計画を立てるとよい。

(1)　書くことを始める時期を工夫する。
(2)　書くことの指導内容を明確にする。
(3)　書くことの指導時間を生徒の実態に合わせて設定する。
(4)　誤りやすい文字を継続的に指導する工夫をする。

さて、正しく書き写すということはどういうことであろうか。次のようなことが考えられる。

(1)　語または数語をまとめて書き写す。
(2)　文を見て１語１語書き写す。
(3)　文全体を見て書き写す。

しかしここで留意することは、入門期には、全員の生徒が楽しく英語を学習していたはずであるが、「書くこと」の指導が始まると、生徒の学力差が現れてくる。そのために、書写の速度も個人差が出てくるようになる。したがって、習熟度によって、書かせる教材を準備することも大切である。いずれにしても「書くこと」の成就感を味合わせることが指導過程では必要なことである。

（イ）語句や文を聞いて正しく書き写すこと。

語句や文を正しく書き写すことができるようになると次に「語句や文を聞いて正しく書き取る」ことが、大切な「書くこと」の指導となってくる。このことは音声指導と大いにかかわりがある。つまり、現代の標準的な英語の発音に慣れさせる指導が必要になってくる。これは、イギリスまたはアメリカなどの英語を公用語としている国の、教養ある人々の一般的な発音であろう。こういう人々の話す文の基本的な音調にも慣れさせることが大切である。音声指導が十分なされた上で、初めて「語句や文を聞いて正しく書き取ること」の指導ができるのではないだろうか。

それでは、どのように指導したらよいのであろうか。まず、最初の段階では、文を構成している単語や語句を書き取らせることから始める。たとえば教師が英文を話したとき、その英文を聞いて、その話題になっている中心となる語を書き取らせる。次に、語句を書

き取らせ、やがて文全体を聞き取って書くという指導である。

前述した語や語句を書き取らせるには、どのような指導が必要であろうか。まず、語の発音を十分身につけさせて、聞いてわからせることである。この語の発音は、オーラルで発音させるとよくできるが、文字を見せるとなかなか正しい発音ができないことがある。これは、英語の文字と音声の違いというか、相互の関係が、十分つかめていないためであろう。

そこで入門期の口頭作業を中心とした指導から、「書くこと」の指導に入るときに、生徒に十分に文字と発音の関係には注意させ、語の綴りと発音関係を理解させ、十分発音できるようにさせることがポイントになる。留意点を上げてみると次のとうりである。

(1)　つづりと音声
(2)　ローマ字などのつづりの影響
(3)　黙字の脱落
(4)　連続したつづり

このように語の発音やつづりを正しく学習することが、やがて、文を聞き取って、正しく書くことができるようになるステップである。

(ウ) 伝えようとすることを簡単な文で書くこと。

「伝えようとすることを簡単な文で書くこと」とは、どんな指導をすることなのであろうか。これは、必要な事がらを、整理して、簡単な文で書き表すことにほかならない。

たとえば、「スポーツについて、何でもよいから思ったことを書いてみなさい」と「書くこと」の指導をした場合を考えてみよう。この場合、生徒は、今まで学習してきた語、句、文を用いて、スポーツについて、相手に伝わるように、書くことになる。その場合、何を題材として取り上げ、何を言い表そうとするのか、要素をひろい出すのが、ポイントになろう。

しかし、書こうとすることが、整理されており、しかも題材というか、相手に伝えたい要点が、きちっと書き表されているかどうかということが大切である。また気をつけることは、日本語を英語で書き表す場合である。したがって、基本的な「S＋V」、「S＋V＋C」、「S＋V＋O」などの文型と、日本文との違いについて、十分指導しておくことが必要である。更に数個の文を用いて書き表すことになるので、まとまりのある文の書き方を指導する場合には、事がらの順序をよくとらえて、相手に伝わるように書かせる指導をすることが欠かせないわけである。

4　第2学年の「書くこと」の言語活動

第2学年の「書くこと」の言語活動においては、次の事項について指導することになっている。

エ　書くこと 主として次の事項について指導する。 (ア) 書こうとすることを整理して、大事なことを落とさないように書くこと。

第1学年の「書くこと」の言語活動との違いは何であろうか。第2学年の「書くこと」の指導事項は、与えられた題材をあるいは、自分の思っていることを整理して、相手に伝

えたいと思うことを、落とさないように書くことを意味している。

「書こうとすることを整理する」ということは、具体的にはどんなことであろうか。これは次のようなことが考えられる。

(1) ごく身近なことについて書くこと。
(2) 与えられた日本文を英語で書き表すこと。
(3) 実際に行ったことを書き表すこと。

この三つのことを総合して、文を書かせる場合、どういうところに重点を置いて指導したらよいであろうか。

新学習指導要領では、言語材料の弾力的な運用をすることができるが、発達段階を考慮せずに文、文型、文法事項を必要以上に与えるわけにはいかないものであろう。しかし第2学年になると、習得する文・文型・文法事項・語・連語・などの言語材料も、第1学年まで学習した言語材料の上に重ねられるので、第1学年の内容より、ややまとまった内容を書くことができるようになるはずである。

ややまとまった内容といっても、第2学年では、あまり高度なことは要求するわけには行かない。まず、第1学年の基礎の上に、一つ一つの文が書けなくてはならない。

第2学年では、教科書などの題材や言語材料を参考にして、自分の日常生活に合わせて語句をさしかえ、あるまとまった内容を書き表すことができるはずである。したがって、次のような指導が必要になる。

(1) 原文を読んで、まず自分の日常生活と比べられるようにする。
(2) 最初は、1語あるいは2、3語を変えて、原文を書き変えられるようにする。
(3) 修正する語句を更に増やして、内容を、たとえば自分の日常生活に合わせて、書き換えていく作業を多く取り入れるようにさせる。

この基本的な指導は、次のことを留意することによって、定着することになる。つまり

(1) 毎時間、一定の時間書くことの指導を行う。
(2) 書くことの指導は、短い時間とする。
(3) ディクテーションとして、語、語句、文、数個の文などを必ず書かせるようにする。
(4) 評価することによって、誤りを指摘する。

などのことである。この「書くこと」の指導は、そんなに長い時間をかけるわけにはいかない。単位時間の中では、わずかな時間になることが考えられるので、必要に応じて、家庭学習として対応することも大切なことである。といって、家庭学習に頼りすぎると、「書くこと」の能力は育たない。むしろ前もって、課題を出しておいて、授業の中で、課題について書かせるという作業が必要になろう。課題を出す場合の留意事項は次の3点である。

(1) 身近な事がらについて文を書かせる。
(2) ある題材について書き表されている日本文を英文にさせる。
(3) 自分が行ったことなどを、ある程度まとまった英文として書かせる。

さて、「書こうとすること」とは、具体的には、どんな内容をさすのであろうか。これは題材と大いにかかわりがある。つまり、書きたいと思う題材である。たとえば、学校生活に関すること、家庭生活に関すること、風俗や習慣、これについては、内外の題材が考えられる。総じて、第1学年よりやや進んだ内容で、引続いて身近なことが中心になること

は確かである。

「整理する」とは、何を、どのように、どのくらい書き表すのか、題材の形式を考えることであろう。また「大事なことを落とさないように書く」とは、第1学年に引き続いて文や数個の文などから、書くことについて練習させることであろう。すなわち、暗記した文、文型などを書かせる、語や語句を入れ替えて文を書かせる、数個の文を書き加える、行ったことや考えたことについて書き表せるようにするなどのことであろう。この場合、題材については、一日の生活、学校のクラブ活動、スポーツ全般、将来の希望などが考えられる。なお、物語文や説明文を読んで、その感想や感じたことなどを書くことになると第2学年では、言語材料が十分とは言えない。この点に留意することが必要であろう。

5　第3学年の「書くこと」の言語活動

第3学年の「書くこと」の言語活動においては、次の事項について指導することになっている。

> エ　書くこと
> 主として次の事項について指導する。
> (ア) 聞いたり読んだりしたことについて、その概要や要点を書くこと。

第3学年では、「書くこと」の目標が、「初歩的な英文の文章を用いて、自分の考えなどを書くことができるようにする」ということを示唆しており、更に「英語で書くことに習熟し、英語で書こうとする積極的な態度を育てる」として、「書くこと」の言語活動を積極的に進めるよう到達目標を示している。したがって、次のような言語活動が考えられる。

(1)　文を聞いて正しく聞き取る。

(2)　書かれている内容を読みとって、それについて概要や要点を書き取る。

(3)　聞いたり、読んだりした内容を理解して、その内容の概要や要点が伝わるように書く。

(1)の「文を聞いて正しく書き取る」は、第1学年、第2学年で指導してきた「書くこと」の言語活動の上に更に積み重ねていくものである。第3学年では、「文を聞いて」といっても、第1学年、第2学年の語、語句、文、文型、文法事項は、程度が高くなり複雑なものとなってくる。したがって「文を正しく聞く」となると、語、語句、文型など、その意味を理解してつづりや語順などを正しく書かければならない。

文を聞いて書き取るためには、第1学年や第2学年と同じように、書写が大切なことになる。第3学年になると言語材料が多くなりかつ複雑になってくるので、更に正しく書くことが要求される。しかし第3学年になると、能力差が出てくる。このことを考慮に入れて指導することが大切なことである。そこで、あらかじめ、書き取らせる内容を知らせ、それぞれの生徒の習熟度に合わせて、学習する機会を与えることが必要であろう。それには継続して「書くこと」の指導をすることがポイントである。具体的には、書き取らせる分量は多くしないように心がける。また個人でチェックさせるのには限界があるので、ペアワーク、あるいはグループワークで作業させ、生徒自身が誤りに気づくような指導が必要である。

文を聞いて書き取らせるとなると、音声について徹底して指導をする必要がある。すな

わち、現代の標準的な発音、語のアクセント、文の基本的な音調、基本的な区切り、基本的な強勢などに習熟させ、聞き取る力をつけることがまず考えられる。

次に、語彙を第1学年、第2学年の基礎の上に積み重ねることである。別表2に示されている基本語彙は、507語であるが、1000語程度という弾力的な運用のなかで、指導していくことが重要である。

文、文型、文法事項については、基本的なものを徹底して理解させ、聞き取りやすいようになれさせることが必要であろう。しかし、音声指導が十分なされていない場合には、語彙や文、文型などの言語材料が理解できていても文を正しく聞き取ることはできない。同時に、正しく聞き取るためには、聞き取ったことを文字に正しく再現する必要がある。そのためには、日頃の書写や書き取りの指導が大切なものとなろう。

(2)の「書かれている内容を読みとって、それについて概要や要点を書き取る」は、第1学年や第2学年の「書くこと」の言語活動を更に進めたものである。ここでいう「書かれている内容」は、題材を指すもので、説明文、対話文、物語り、日記、手紙文などの形式のあるまとまった文章を指すものである。

このようなあるまとまった文章を読み取るとは、具体的にはどうすることであろうか。これは、いろいろの題材についての文章を読んで、それについて感じたこと、考えたことなどを書きしるしたり、その概要や要点つまりあらましであるとかポイントになるところを、わかるように書くことである。

書かれたものについて感想を書いたり、その概要や要点を書くことができるようにするには、書かれている文章を理解し、その概要や要点がわかるように内容を理解させなければならない。それには一文一文の意味をとらえ、文と文の関係や、流れをつかんで、何を述べようとしているのかわからせる指導が必要である。

たとえば、あるまとまった文章について、その内容について、数個の質問を与え、その質問に答えさせる。その数個の質問の答が、すなわち、概要や要点になる。また、情報を新しいものから、古いものの順にとらえさせる過程から、あらましを把握させる。つまりscanning や skimming をする中で概要や要点をつかませる。また、paragraph reading をさせる中で、topic sentence を理解させ、概要・要点を確実に理解させることなどであろう。このことはまた、summarize が容易に行えるようになるわけである。第3学年においては、このような指導が必要である。

(3)の「聞いたり、読んだりした内容を理解して、その内容の概要や要点が伝わるように書く」とは、どんな言語活動であろうか。これは、(2)で前述したことに加えて、聞いたり読んだりした内容の概要や要点が、読み手、つまり相手に伝わるように書くことである。

この場合、聞き取ったり、読み取ったりした内容について何を書くかということは、その内容によって様々である。たとえば、聞き取ったり、読み取ったりした内容の感想であったり、意見であったり、返事であったり、あるいは提案であったりして、その時々によって異なってくる。それらを書き表す際に概要や要点が相手に伝わるように書くことが求められるわけである。これらの指導は、生徒個人の能力差が伴うだけに、きめ細かい「書くこと」の指導が望まれる。

おわりに

これまで、「書くこと」の言語活動はどうあったらよいかということについて述べてきたが、英語で表現する能力を養うためには、実際に英語を聞いたり、話したり、読んだりする活動を十分に行う必要がある。そのためには、生徒の発達段階に応じて、前述のように指導事項をより具体化することが肝要である。

しかし、これらの指導事項が、適切に生かされるようにするためには、教師の創意工夫が大切なことになる。更に、生徒一人一人が十分言語活動ができるように配慮するとともに、生徒の個性・発達段階に応じてきめ細かい指導がなされなければならない。

また、英語を学ぶことに対する興味や関心を育て、第1学年から第3学年までの3年間を通して、偏りのない言語活動が展開されるように配慮することが大切である。

とりわけ、「書くこと」の言語活動は、「聞くこと」、「話すこと」及び「読むこと」の言語活動と密接な関係があるので、指導に当たっては、「書くこと」の領域を独立して扱うのではなく、他の領域の言語活動との関連において指導することが必要である。特に日本語と違う英語の発想や表現の方法を知って、的確に書かせるためには、言語材料とのかかわりもあるわけで、あらためて、題材や言語材料の組立などに留意することが期待される。

参考文献

1 H.D. Widdowson (1978) *Teaching Language as Communication* Oxford University Press
2 Jane Willis (1981) *Teaching English through English* Longman
3 原田昌明 (1990)『英語の言語活動』大修館書店
4 文部省 (1989)『中学校学習指導要領』文部省
5 〃 『中学校指導書外国語編』開隆堂出版
6 荒木秀二・長江宏 (1989)『中学校学習指導要領の解説と展開』教育出版
7 和田実・羽鳥博愛編 (1989)『中学校学習指導要領の展開』明治図書